

平成 16 年 9 月 17 日

東京港入荷最近の特徴

東京港に入荷する木材製品は、東京木材埠頭株式会社が管理しているのは、ご承知の通りである。一日 200 台のトラックが出入り文字通り輸入ランバーの首都玄関口だ。岸壁は全長 72 m、水深 12 m、3 万トン級木材専用船 3 隻の接岸が可能な大型埠頭だ。荷捌き施設は約 26 万 m² あり、8 万 m³ のの収容能力がある。近年入荷材の 55% が KD 材集成材などの変化に対応すべく、雨天保管倉庫や荷捌き施設の拡充に努め、現在では 52 棟の有屋施設を完備、12 万 m³ の収容能力がある。

2004 年 8 月まで東京港入荷状況の特徴は、米加材が 1 割減の 40 万 m³、EU 材は 1 割増の 13 万 m³、両者の合計で 4 年前に 97% が、中国 4 倍インドネシア 34 倍の大幅増加となりシェアは 86% に低下した。

10月13日

東西の木機展をみて

今年の木工機械展は、東西に別れ、東京はビッグサイドで、大阪は南港の展示会場で一週間ほど時期をずらして催された。聞くところによると出品するメーカー側と、販社中心の主催者側の意見がわかれ、メーカー側は負担のみ大きくメリット少なしとして、意見調整が付かず今回のような形となった。私は東西両方を見たが、東京の展示会場は、規模最小で 今年の4/1大型実演も、少なく、内容も乏しい入場者も少なくさびしい限りだ。

これでは日本の木工業界の明日があるのか

一方、大阪の展示場は約3倍の規模で、こちらは入場者も多く、あちこちで大型実演があり活況であった。東西一番大きな違いは、大阪では木材学会が中心となり、産学官の三者が集まってウッドワンダーランドと称して、コーナーを設け木材のPRに努めていることである。特筆すべきことである。

従来から木機展の一角にこのようなコーナーがあり、木材の需要拡大に努めてはいるが、今回の大阪展は何か一味違った気の入れように感じたのは私だけだろうか？

ある調査によれば、わが国の木工機械の売上規模は300億円、イタリア5千億円、ドイツ7千億円輸出が70%である。しかも日本には海外からの機械がどんどん入り市場を奪われている。規模的にはドイツの25分の一、こんな状況で仲間内の争いをしている時間があるのか？一丸となり訴求力のある展示、我々ユーザーが明日の夢を持つことができるよう期待し、望んでやまない次第である。

平成 16 年 11 月 6 日

HM CEO メッセージ 25号

欧州の木材工業事情シンポに参加

EWI（ヨーロッパ・ウッド・イニシアチブ）主催の 04 年ヨーロッパ・ウッドデーイン東京 と銘打ってシンポジウムに参加した。

会場は、東京大学の弥生講堂・一条ホールを選び、しかけは満点の演出であった。

日本側のパネラーとしては 安藤東大教授・鎌田室蘭大学（建設システム専門）古市教授（建築都市設計専門）、ヨーロッパ側では、大学教授、設計事務所、企業の開発担当者などが参加、ジャパンランバージャーナル北川氏のコーディネーターによりディスカッションが行われた。

1. ヨーロッパでは大規模木造建陸物が、無制限に近い状況で建設されていることが紹介され、日本の建築基準法は、厳しすぎるとの結論、官民上げて規制の緩和に、取り組まなければならない、このことが、森の再生を促し、地球環境を守ることだと結論付けた。

2. 熱処理木材については、250 度の高温で、炭化寸前まで燻煙し、植物の菌を排除してから使用する強度、耐久力に優れていると紹介あり日本で言う燻煙木材と理解すればよい。

3. 長さ 20 米 X 幅 5 米 X 厚み 0.3 米のラインが紹介され「長広厚多用途高品質の集成材」の集成材が紹介された。ディスカッションのなかで、建築基準法の違いのため、日本では、3 階以上の木造建築物が建設できぬため木材需要が低迷している。日本では、最近基準法の緩和がみなをされつつある時期、官民協力のうえ、更なる緩和のための、大運動を展開すべきである。

平成 16 年 11 月 6 日

HMメッセ 26 号

I P E C 2 1

インテリア関係の先生方、企業、資材業者、需要家などが共同で需要開発を目的とするコラボレーションは今年で 4 年目、方向性が見えてきた。

第一にいえることは、建築関係業界とともにそれぞれコラボによる共同展示で、ボリュームと、幅を広げた、セミナー重視によるより対象を広げ、参加者に対する訴求力を強めたことなど定着してきた。I P E C 自体では、デザイナーズショップと銘打ち、メーカーと共同開発でデザイナーの先生方がそれぞれに新作を発表されている。なかでも、部屋の家具化と称して、6 畳ほどの部屋を作り空間におくだけで、インテリア全体をデザインした「家具部屋」入場者の関心が集まっていた。そのほかには、和紙がインテリアの主な資材として、木材特にツキ板に追いついてきたことが、気になった。東京ツキ板商工業会は、初回の 4 年前セミナーを含めて参加したが、その後は参加していない。こんなところが業界の弱いところか。P R は地道に、そして息ながく続けなければならない。

11月25日

CEOメッセージ27号

ジャパンホーム&ビルディングショー

今回の出展は総数600社、1040小間のうち新規出展が約55%、海外が約15%の構成である。一時期の国内建材メーカー主体での単に製品を並べる展示会から考えると様変わり時代の推移を見る思いだ。特に海外勢はまだ素材や材料の段階だ。国内メーカーではすでに卒業したレベルである。しかし積極的な出展には、脅威を感じるのは私だけだろうか？特にカナダ大使館では、参加者を夕食会に招待し、公使も挨拶して国をあげてのPRに努めている。日本はどうだろうか？業界不況不況といいながら、海外の出展にここまでのことをしているのか。中国などで木材輸出の動きがあるが、県単位の域を出ていない。国を挙げて木材の需要開拓に注力すべきと提案する。

11月25日

28号

耐熱木材・サーモウッド

フィンランドでは国をあげて開発に取り組んでいる。VVRとう林業試験場のような機関が開発し、協会を組織、メーカーに技術を供与、官民共同で普及に努めている。簡単に言えば、電子レンジのような装置で高熱を加え、水分を飛ばし、セルロースを分解して、糖分を変質固形化して、バクテリアをシャットアウト1. 腐食を防ぐのが最大の狙いだ、2. 含水率15%固定強度、3. 色の深みなど、防火性能については開発中、狙いは低質針葉樹の高度利用と見た。わが国の間伐材有効活用になれば、需要開発に大きく寄与することができる。

平成 16 年 12 月 11 日

ホーム ページ 通信 第 29 号

芝浦工大を視察して

江東区の★課主催による産学連携の一環として芝浦工業大学の視察会に参加した

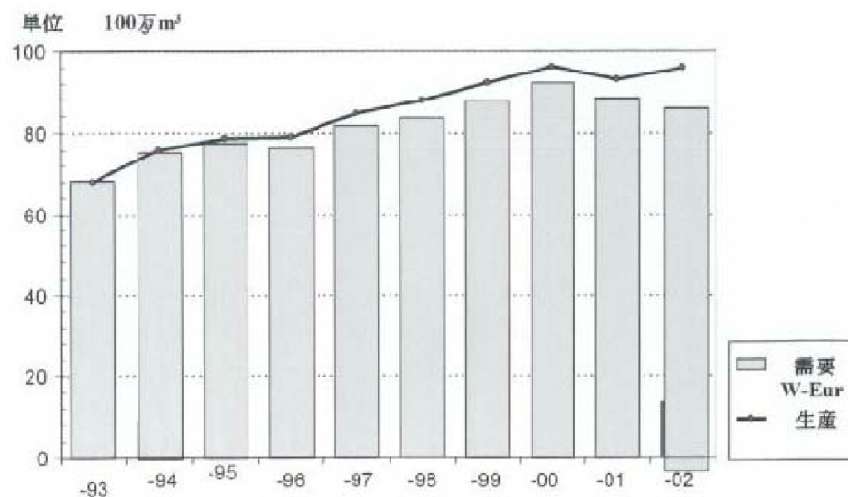
参加者は江東区の中小企業の経営者 10 数人である。70 数年歴史を持つ工業専門の大学だ。現在の学長はノーベル賞受賞で有名な江崎玲於奈博士である。この大学が 2 年後に江東区の石川島の跡地に移転する。江東区にとってはこんなようことはない。

今回視察したなかで特筆すべきは、色識別ロボットである。完成すればスーパーなどで、お客様の色にあわせて、買い物車が色を認識して追いかける実に便利なもの、実用化まであと一歩だ。豊洲にくる二年後が楽しみだ。このような機会を与えてくれた江東区★課の皆さんに感謝申し上げます。

30号 欧州木材産業の現状と戦略

ヨーロッパはEU15カ国に190万人、25カ国に258万人の木材就業者を抱えている。需要は02年の段階で8000万m³、供給は1億m³あり約20%の供給過剰だ。このままでは発展は望めない。最大顧客の日本に照準を合わせて需要拡大のアクションを展開中だ。10年間の実績は、製材+プレーナー材で、03年には272万m³の実績を作った。ヨーロッパの最大の顧客は日本である。需要拡大に協力してほしいとの趣旨である。大変熱心な連中であついで、東大の一条講堂で同じようなセミナーを開催したが、これで2度目だ。ユーロ高でコストが上がり、製品を値上げしているがなかなか追いつかないのが現状である。集成材の原料であるラミナーも圧等的な強さを誇っていたがユーロ高で競争力を失いつつある。以下数回にわたりご紹介しご参考に供したい。

ヨーロッパの需要と供給



31号 欧州木材の現状と戦略—2

1. 木材製品生産単位別比較 EU15カ国 2002年の統計 生産金額 約200億円
家具 56%、製材品加工品11%、木質系パネル8%、建設基礎資材17%、その他8%
家具生産が圧倒的に多い。

2. 生産国の比較では

ドイツ、イタリア、スペインなど中央ヨーロッパが多く、北欧三国スウェーデン、フィンランド、デンマーク、オーストリアなどが続く、
中欧では家具など完成品生産が多く、北欧では針葉樹製材品、加工品など加工度の低い製品が多いことが読み取れる。

3. 木材製品の生産 全世界との比較

MDF 40%、PB 60%、OSB 9%、PW 12%、製材品ほか35%
グローバルな生産国だ。消費は若干下回り供給過剰気味だ。

4年1月18日

CEOメッセ

32号欧州木材産業の現状—3

全産業の再編化・大量生産化

2003年の調査によれば、一位から10位までを100とすると、一位メーカーのシェア33%、2位から10位まで66%であり、トップメーカーのシェアが拡大し、これは大EU経済圏により、垣根がなくなりグローバル化、寡占化が進んだ結果と史料する。

GDPの変化率

90年～95年成長率は、西が1.4%東が-3.4%平均で1.2%、10年後の02年～05年まで(一部予測)西1.8%、東4.4%、平均で2.0%である。この数字は、西ヨーロッパは成熟し、東ヨーロッパが伸び盛りの成長を意味している。

人口の伸び率

東、西とも0%かマイナスであり、こちらは期待できない。